

ボート王国「かわべ」の持ち味を生かして

～カヌー体験・ボート学習を核としたふるさと教育再構築～ 川辺町教育委員会 教育支援課

1 水運で栄えたまちからダム湖出現まで



川辺町は、古くから町民に愛されている納古山など数多くの山々が聳え、町の中心を南北に流れる飛騨川沿いに開けた「川縁のまち」である。人口約1万人。一帯は河岸段丘上にあり、日当たりが良く、食物や飲料水を得やすいことから、縄文時代より人々の暮らしぶりを知る遺跡や古墳が多く発見されている。江戸時代になると、町は11の村に分かれ、最北部の下麻生村には、室町時代から綱場があった。陸運未発達の前、飛騨地域の良質な材木を都へ運ぶため、水運が専ら利用されていた。流れてくる材木に綱を通して束ね、材主ごとに集めて筏を組み、下流へと流す「綱場」を設けた。下麻生は狭い流れが一気に解き放たれる川の特性から、最適な綱場として活用できた。筏流しにより、村は小江戸と呼ばれる程に発展した。

大正11年、国鉄高山線の開通により、材木の運搬が自動車で行われるようになり、賑わった綱場は活気を失っていった。昭和13年、町内に水力発電用ダムが建設された。そのため、流れの厳しい飛騨川は、静かなダム湖となった。

川幅150m、1000mの直線距離が確保可能であり、風の影響も少なく、流れもほとんど無い条件は、漕艇場に最も適しており、全国に名だたるボート競技場として認知されていった。町も「ボートを活かしたまちづくり」を標榜して、東アジア大会、国体等を誘致するとともに、町民レガッタを開催するなど、成果を挙げてきた。



2 我がまちにしかできない体験を通して



小学校3校児童数536名、中学校1校生徒数265名、川辺町でしかできないボート体験をふるさと教育の一環として行う。ボート競技をどこよりも身近に感じている中学生、放課後の部活動でボート競技の練習を行うのは、県下で唯一川辺中学校ボート部のみである。しかし、近隣の高校にはいくつかのボート部が同じ漕艇場を利用して練習を行っているため、良き手本を目の当たりにすることができる。小中学校における『総合的な学習の時間』には「まちの特色」「水との関わり」「自然とのふれあい」「人とのふれあい」をキーワードに、小学校で「カヌー体験」を、中学校で「ボート教室」を位置づけてきた。

特に小学校は毎年、6月から7月にかけて、『水上スポーツに親しむこと、水には危険性が同居すること、カヌーの基本的な操作を身に付けること、転覆（沈と呼ぶ）したときの艇を戻す方法を身に付けること』をねらいとして、プールでの教室を開催する。乗艇の方法、バランスの取り方、パドルの漕ぎ方をプールサイドにおいて学んだ後、実際にカヌーを浮かべての実践を行う。指導者は教育委員会事務局職員が担当する。初めてカヌーを体験する5年生児童の中には、ライ

フジャケット装着にも関わらず怖さでパニックになる子もいるが、指導員の手ほどきに笑顔が徐々に戻るようになってくる。指導員の寄り添いと言葉がけにより、全員がコツを覚えて1次終了となる。

第2次は飛騨川にカヌーを浮かべ数百m先の目的地に向かってカヌーを漕ぎ始める。歓声と笑顔が飛騨川に満ちる。職員は万が一に備えて、モーターボートでの巡回待機と、カヌーに乗っての巡回を行う。一人漕ぎ、二



人漕ぎ、カヤックも体験する。肢体不自由児も、保護者からの要望に応じて、競技カヌーの講師を配置したり、水上競技に堪能な職員が張り付いたりして指導にあたる。発艇場から600m先の目的地を定め、約束に従って往復する。その後は決められた範囲内での自由漕行時間である。滝が流れ落ちる場所や橋げたの下などが人気ポイントで、カヌー上からの山や町や人の様子の観察は、新たな「わが町川辺発見」にもつながっている。

3 中学校におけるボート教室

川辺で学び、川辺で育つならば、「どの子も一度はボートを体験させたい。」、ボートを通してチームワークの一端を知り、ボートを通してふるさと理解を深めようと、1年生の「総合的な学習の時間」にボート教室を位置づけている。1次は座学で学ぶ。川辺町の歴史、ボートの歴史、ボートの種類や漕艇方法等を中心に、教育委員会や町長部局職員のボート競技経験者が講師を勤める。2次は学年を2班に分け、飛騨川に艇を浮かべて漕艇方法を学ぶ班と、陸上において模擬漕艇機械(エルゴメーター)に挑戦する班とに分かれて実施する。指導者は近隣の高校生(ボート部員)の協力を得て、4~5人の班に1~2名の高校生が付き、一班一艇で使用するボートは、操作が安定しており、運動量も一人1本のオールで漕げる「ナックルフォア」と呼ばれる艇に挑戦する。漕艇方法や息と力の合わせ方などを実際に試して学ぶこととなる。



4 課題と今後

大切なふるさと学習の一環がコロナ禍において、2年間、カヌー・ボート体験学習を行うことができなかった。少子高齢化に加えてグローバル化社会が進む中で、自尊感情を持ち、ふるさとに誇りと愛着をもって成長していく若者が減少傾向にある。「歴史」「文化」「伝統」「芸能」「祭」「人」「食」「家族」「歌」等々、ふるさとへの想いは人により拠り所が異なるが、この町を巣立ち故郷を想うとき、「ボート」を拠り所とした学習や体験が巣立つ若者の心に淡い記憶として残ることを願う。そして、いつか故郷に逞しく貢献できる若者の成長を期待したい。

現在コロナ禍での体験活動は未実施だが、再開後は、中学生はもちろんのこと、小学生における体験学習にも、近隣高校生の参画を期待し小中高の交流の場を図っていきたいと考えている。